

自分の読み取りと比較してみよう。

自分と違つところを
チェックしておこう。

心情曲線の続きを
書いてみよう。

二 その日も、夕食の後に僕はぐうちゃんの部屋でほら話を聞いていた。
ぐうちゃんの話はおもしろいが、大げさでならぬ話。
↑プラス
0
↓マイナス

「悠君。世界でいちばん長い蛇は何だか知っているか。」

ぐうちゃんは、細い目をめいっばい見開くようにして僕にきいた。それは、いつもおもしろい話をするときのぐうちゃんの癖で、だから、僕はぐうちゃんのその表情が好きだ。でも、今日は話のテーマがちよつと幼稚すぎる。とはいえ、宿題するよりはすつとおもしろそうだから、母に見つかるとその話を聞いていることにした。

「アナコンダとかいうやつだね。アフリカの密林あたりにいる。」

「悠君は地理に弱いんだなあ。アナコンダがいるのはアマゾンだよ。現地の人にはスクリューとよんでいて、これはポルトガル語で水蛇という意味だ。長く太くなりすぎて蛇行するには地球の重力が負担になって水に入ったんだ。」

「泳いでいて出会ったら嫌だな。飲み込まれちゃいそうだな。」

「そう。本当に人間なんか簡単に飲み込んでしまう。生きてる馬だって飲み込んでしまうぞ。」
ぐうちゃんの話はいつも怪しい。僕がおもしろがればいいと思ってるのだ。
未知のものへの魅力。

「そんなのうそさ。だって馬の背は人間よりはるかに高いし、体重だって普通五百キロはあるって何かの本で読んだよ。アナコンダがいくら大きいといってもそんな大きな口は開けられないさ。ありえねえ。」

「ありえねえなんだよ。」

ぐうちゃんは変な言い方をした。
「立っている馬をそのまま大口を開けて飲み込むわけじゃないんだ。まず馬の首のあたりにかみついて馬をひっくり返す。それから馬の体に巻き付いて馬の脚の骨をバキバキ折っていく。飲み込みやすいように全体を丸くしていくんだなあ。それから、ゆっくり、飲んでいくんだ。」

「本当かなあ。カの籠もった話し方を聞いていると、ぐうちゃんの話の魅力に強く引きつけられている。でもその怪しさがやっぱりおもしろい。どうせほら話だから僕も大きく出ることになった。魅力を感じてほしい。」

「そうだね。ジャーメートル！」

「ブプー。」

子供扱いされたくない。
まるつきり子供扱いだ。

「アマゾンでは普通に三メートルのナマズがいるよ。」

「うそだあ。ありえねえ。」

「さすがに頭にきた。僕を小学生ぐらいと勘違いしているんだ。」

「うそじゃないよ。口の大きさが一メートルぐらいだよ。」

ぐうちゃんはまた細い目になった。僕をからかって喜んでる目だ。

「ふうん。」
ぐうちゃんの話は信じられない。子供扱いされたことではかばかしいと感じてしまっている。なんだかばかしくなったので気のない返事をした。

「あ、信じてないだろう。じゃあがらつと変わって、きれいで小さい宇宙の話をしようか。」

ぐうちゃんは話の作戦を変えてきた。宇宙の話は好きだ。例えば宇宙には果てがあるのか、とか二重太陽のある星の話とかだ。ところが、ぐうちゃんの話は、地球の中の宇宙の話だった。

「北極には、一年に一度流水が解けるときに小さな氷の惑星ができるってイヌイットの間ではいわれている。アイスプラネットだ。めったに現れないので、それを見た者はその年いいことがいっぱいあるといわれている。」

「童話か何かの話？」

「いや、本当にある話だよ。見ることできた者を幸せにするという、地球の中にある小さな小さな美しい氷の惑星。いい話だろ。」

「やっぱりありえねえ。俺、風呂の時間だし。」

ぐうちゃんは続けて話したそうだったけれど、母親が風呂に入ると大きい声で呼んだので、それを口実に逃げることにした。ぐうちゃんは、やっぱり今どきの中学生をなめているのだ。
なめられていると感じている。

三 翌日、学校に行く途中で、同じクラスの吉井と今村に会った。初めはどうしようかと思っただけ、馬も飲んでしまっただけか、アノコソダヤ、三ノメトルもあるナマズの話はおもしろかったし、氷の惑星の話も、本当だったらきれいだろなと思っただけ、つい吉井や今村にその話をしてしまった。

二人は僕の話が終わると顔を見合わせて、「ありえねえ。」「証拠見せるよ。」と言った。「そんなほら話、小学生でも信じないぞ。」そう言われればそうだが、だから、部活が終わって大急ぎで家に帰ると、僕は真っ先にぐうちゃんの部屋に行つて、「昨日の話、本当なら証拠の写真を見せるよ。」と無愛想に言った。ぐうちゃんは少し考えるしぐさをして、「そうだなあ。」と言って、目をパチパチさせている。

「これまで撮ってきた写真をそろそろちゃんと整理して紙焼きにしないと、と思つておるんだ。そうしたらいろいろ見せてあげるよ。」
「僕のぐうちゃんに打撃の味方はこれまでよりマイナスの方向に向かっている。やむを得ずの怒り。ぐうちゃん自体を信じられなくなった。おつとした。そんな言い逃れをするぐうちゃんは好きではない。なんかぐうちゃんに僕の人生が全面的にからかわれた感じがした。吉井や今村に話をした分だけ損をした。いや失敗した。僕までほら吹きになってしまったのだ。」

それから夏休みになってすぐ、ぐうちゃんはいつもし少し長い仕事に出た。関東地方の各地の川の測量をするということだった。僕は人生を全面的にからかわれて以来、あまりぐうちゃんの部屋に行かなくなっていったから、気にも留めなかった。
ぐうちゃんに対して距離を取っている。心も。ぐうちゃんがいなくなるとも平気だ。ぐうちゃんへの思いがどんどん冷めていく。いや、いや。

夏休みも終わり近く、いつものように週末に帰ってきた父と母が話しているのが、風呂場にいる僕の耳にも入ってきた。
「僕たちは、都市のビルの中にいるからなかなか気がつかないけど、由起夫君は若い頃に世界のあちこちへ行つていたので、日本の中にいたら気がつかないことがいっぱい見えているらうね。なんだか羨ましいような気がするな。」
母は、珍しくビールでも飲んだらしく、いつもよりもっと強烈に雄弁になっている。

「あなたは何をのんきなことを言っているの。由起夫が、いつまでもああやって気ままな暮らしをしているのを見てみると、悠太に悪い影響が出ないか心配でしかたがないのよ。例えば極端な話、大人になつても毎日働かなくてもいいんだ、なんて思つて勉強の意欲をなくしていったとしたら、どう責任取ってくれるのかしら。」

父が何かを答えているようだったが、はっきりとは聞こえなかった。ただ、僕のことぐうちゃんが責められるのは少し違う気がする。そう思うと、
距離はとっているが、やはりぐうちゃんのことを好き。ぐうちゃんと元通りの関係になりたい。帰さずおれたい。
電気の消えたぐうちゃんの部屋が急に寂しく感じられてきた。ぐうちゃんを大切に思う。自分の気持ちに気がつく。

四 それから、ぐうちゃんがまた僕の家に帰ってきたのは、九月の新学期が始まつてしばらくした頃だった。顔と手足が真っ黒になつていて、パンツ一つになると、どうしても笑いたくなくなつて困つた。
残暑が厳しい日だった。久しぶりにぐうちゃんの話を知りたいと思つた。またからかわれてもいい。暑いから、今度は寒い国の話を知りたい感じた。
ところが、ぐうちゃんの話は、でっかい動物の話でも、暑い国でも、寒い国の話でもなかった。

「旅費がたまつたから、これからまた外国をふらふらしてくるよ。」
ぐうちゃんは突然そう言つた。「でもまあもう少し。」にはこんな意味があつたのか。ぐうちゃんはいつもと変わらずに話を続けている。それなのに、ぐうちゃんとの別れを感じている。
ぐうちゃんの声はどんどん遠くなっていく。気がつく、僕はぶつさらぼうに言つていた。
せめてぐうちゃんに近づくつもりで旅に出るといふ。その驚きと、僕にとつては勝手に思えるぐうちゃんへの怒りが思はず出た。
「勝手に行けばいいじゃないか。」ぐうちゃんへの思いが強い分、ショックも大きい。

ぐうちゃんは、そのときちょっと驚いた表情をした。何かを話しかけようとするぐうちゃんを残して僕は部屋を出た。
それ以来、僕は二度とぐうちゃんの部屋には行かなくなった。母は、そんな僕たちに、あきれたり慌てたりしてはくれど、父は何も言わなかった。
十月の初めに、ぐうちゃんは小さな旅支度をして、「いそろう」を卒業してしまつた。

出発の日、僕は、何て言つていいのかわからないままぐうちゃんの前立っていた。ぐうちゃんは僕に近づき、あの表情で笑つた。そして、何も言わずに僕の手を握りしめ、力の籠もつた強い握手をして、大股で僕の家を出ていった。
「ほらばつかりだつたじゃないか。」別れを受け止めきれず素直になれない。寂しさを伝えられない。
「いそろう」がいなくなつてしまつた部屋の前で、僕はそう思つた。

五 ぐうちゃんから外国のちよつとしゃれた封筒で僕に手紙が届いたのは、それから四か月ぐらいたつてからだった。珍しい切手がいっぱい貼つてあつた。
「あのときの話の続きだ。以前若い頃に、北極まで行つてイヌイットと暮らしていたことがあるんだ。そのとき、アイスプラネットを見に行こう、と友達になつたイヌイットに言われてカヌーで北極海に出た。アイスプラネット。わかるだらう。氷の惑星だ。それが北極海に本当に浮かんでたんだ。きれいだったよ。厳しい自然に生きてる人だけが目にできる、もう一つの宇宙なんだな、と思つたよ。地上十階建てのビルぐらゐの高さなんだ。そして、海の中の氷は、もっともつとでっかい。悠君にもいつか見てほしい。若いうちに勉強をたくさんして、いっぱい本を読んで、いっぱい『不思議アタマ』になつて世界に出かけていくとおもしろいぞ。世界は、楽しいこと、悲しいこと、美しいことで満ち満ちている。誰もが一生懸命生きてい

る。それこそありえないほどだ。それを自分の目で確かめてほしいんだ。」
手紙には、ぐうちゃんのカナ文字がぎっしり詰まつていた。ぐうちゃんに自分かほきたい人生を力強く生きていくことを感じている。
ぐうちゃんの話は全て本当にある話だ。ぐうちゃんに対する見方が変わり、僕も成長。僕に届きたい思いの強さを知る。
そして、封筒からは写真が二枚出てきた。一枚は人間の倍ぐらゐあるでっかいナマズの写真。もう一枚は、北極の海に浮かぶ、見た者を幸せにする

という氷の惑星の写真だつた。

「いそろう」がいなくなつてしまつた部屋の前で、僕はそう思つた。

「いそろう」がいなくなつてしまつた部屋の前で、僕はそう思つた。